

女性と文学

—描かれた女と書く女—

(1・2年 後期 2単位)

小林 修

授業のテーマ・目標

日本の近現代における「女性と文学」を考察の対象とするとき、大きくふたつのアプローチが考えられる。ひとつは、文学作品などに描かれた女性のイメージの変遷を追うやり方であり、もうひとつは書く主体としての女性の系譜をみていくやり方である。前者の場合、女性の表象の多くは、長い間、男性作家によって一方的に描かれ、表象の客体となってきたことをまず確認する必要がある。また後者の場合、書く主体としての女性が一般化し、また多様化している現象に注目する必要がある。この授業では、日本の近代文学の小説・詩などを読み解くことを通して浮かび上がる様々な女性のイメージを知るとともに、書く主体としての女性について考えるきっかけになればと考えている。受講者は、歴史的に形成されてきた様々な女性像と向き合い、自分自身の問題意識を育んでほしい。

授業の内容

具体的には、下記のようなテーマを設定して授業を展開していく予定である。授業は、基本的に講義形式で進めるが、人数によっては受講者をグループ分けして課題を出し、文献資料などを調べて発表してもらうような形式も考えている。どちらにしても、テキストを一読して、物語の筋を理解して終わりにするのではなく、テキストに応じた問題点を見出し、それをひとつひとつ掘り下げて考察していくことになる。なお、テキストは授業のなかで次回分をプリントで配付し、事前に読み込んでおいてもらう（小説の一部ということもある）。

1. はじめに（授業の内容や進め方についてオリエンテーション）
2. 小説の〈語り〉仕組まれた男性性
3. ロマンティック・ラブ・イデオロギーについて
4. 妊娠小説論
5. モダン・ガール幻想
6. 〈女学生〉〈少女〉

*今年度は、森鷗外「舞姫」、小杉天外「魔風恋風」、田山花袋「蒲団」、中島京子「FUTON」、吉屋信子「花物語」などを扱う予定である。

テキスト・教材

授業中に次回分を配布する。ただし、欠席などにより次回分のテキストを入手できなかった人は、友人からコピーさせてもらうなどして自分で準備しておくこと。

成績評価の方法・基準

授業中に提出する小レポート（20%）＋定期試験あるいはレポート（80%）

参考書・準備学習

授業中に適宜紹介する。

注意事項

何かを覚えたり技術として習得したりする科目ではないので、各自が自分の問題意識を持ち、授業を通して、それを深化発展させることを考えてほしい。